

演題 7

養護施設児の歯科疾患状態とその背景について

○谷 斉子、森主宜延、柿元協子、上田泰弘、福満和子

鹿大・歯・小児歯

やむなく福祉施設で集団生活をしている子供たちの歯科疾患状態は、家庭の子供たちと比較し良好であることが以前報告されている。最近、このような集団生活を強いられる子供たちの入園理由も以前とは異なるため、歯科疾患状態も以前と同様であるとは限らないことが推察される。もし以前と同様に良好であるならば、その背景に何があるのか究明することは、歯科保健学上、有意義である。今回、養護施設児を対象に歯科疾患状態とその背景を検討したので報告する。

対象と方法：

対象は、鹿児島県内の福祉施設4ヶ所を設定し、施設で生活する男子137名、女子91名、合計228名である。

方法は、一般歯科検診にくわえ、カリオスタット、RDテストを実施し、主に齲蝕関連項目について全体と乳児院経験の有無により群分けし検討した。

結果：

1. 齲蝕罹患状況は、一般集団と比較して良好な状態を示した。
2. 入園時期ならびに入園期間と齲蝕罹患状況との関係は、入園期間よりむしろ入園時期すなわち、入園時年齢の影響が強く10才から12才入園した対象者の齲蝕罹患状況は不良であった。
3. 入園理由と齲蝕罹患状況との関係は、保護者の育児姿勢の積極的的不良により入園したものの程、不良であった。
4. 乳児院経験が齲蝕罹患状況に大きく影響し、経験ある者が極めて良好であった。
5. カリオスタットならびにRDテストの結果から、齲蝕罹患状況と口腔細菌との関係は明瞭に示されなかった。
6. 歯肉炎の状態は、乳児院経験者が良好であったが、これは年齢差による影響であることが推察された。

演題 8

乳歯多数歯に見られる形成不全についての一考察

○上田泰弘、森主宜延、小椋 正

鹿大・歯・小児歯

歯にみられる異常は、歯科治療の対象としてでなく、その固体の生育過程の鏡として、小児の診断学上非常に貴重な資料とも考えられる。

最近、歯の異常とその原因に関する報告が数編され、以前と比較し、明瞭な資料が提示され歯の異常より、生育過程の異常を計り知ることには、より正確になりつつあると考えられる。

今回、このような状況において、乳歯多数歯にわたる形成不全の症例を得、これを機会に乳歯の形成不全に対する対応を、数例の症例を通して、その臨床的診断についての考察、原因、そして臨床的管理に関して考察した点について報告する。なお症例は、Weimannにより提示されている3つのカテゴリー、即ち、遺伝的、全身的、局所的にくわえ、原因不明の4つのカテゴリーとし、その代表数症例とした。